ふくしま地域材活用協議会

CLTの性能など勉強

南東北デイ施設で構造説明会

CLTの性能などについて理解を深めた説明会

ふくしま地域材活用協議会（事務局＝藤寿産業）は29日、須賀川市産業会館で、CLTを使用した、南東北春日デイサービスセンター（仮称）新築工事の構造説明会・講演会を開いた。参加者は、森・林産業再生のカギを握ると言われているCLTの性能および可能性について理解を深めるとともに、現状と課題などについて情報共有した。

建設現場は、医療法人社団三成会が整備する介護施設。規模はW造（集成材ラーメン構造）3階建て延べ1277・25平方㍍で3階が事務所、1～2階がデイサービス施設。県産材を使用し、柱、梁などに集成材・一般材を191・6立方㍍、CLTパネルは壁、階段2カ所と2～3階の床材に68・7立方㍍使用している。設計・施工は荒牧建設、集成材などの製造加工とCLT加工は藤寿産業。

現場は、林野庁の「平成28年度CLT建築物等普及促進事業のうち協議会が取り組む実証的建築支援事業」の採択を受けており、①CLTパネルの利用方法②遮音性能③鋳鉄の橋脚金物について「建築物の設計実証」と「建築物の建築実証」を行っている。

説明会は22日開いた行政向けに続く2回目で、県内自治体の建築、林業関係職員や建築設計、施工会社の技術担当者ら約100人が出席し、初めに同協議会員の荒牧幸雄荒牧建設社長が「実証データを活用し、本県木材の需要拡大につなげていきたい」とあいさつした。

同協議会事務局の渡邉宏氏が、新築工事の施設の概要と、施工時におけるCLT実証事業の検証結果や構造方針と施工状況などについて説明。検証結果を踏まえ、施工工期の短縮や1種類の橋脚金物使用による施工性向上とコスト縮減を挙げ「木部を表しで使用する施設づくりが可能になる。木がやすらぎと安心感をもたらす、これまでにない快適な施設環境の創出を目指したい」と述べた。

東京大学生産技術研究所の腰原幹雄教授が「大規模木造建築の標準化―地域の建築物に見る国産木材活用の可能性」と題して講演した。腰原教授は、大規模木造（非住宅）建築の全国事例を紹介しながら「これまで木造は屋根を中心とした建築だった。都市部で大規模木造建築の需要を増やすには、屋根の建築から、床、壁、柱の建築として、使用した木をどのように見せるかがカギになる。木造化する建築はターゲットを絞り、そのための技術を考え情報を共有していくことが必要になる」などと話した。

講演終了後、参加者は現場に移動し、CLTの使用状況などについて説明を受けた。